

山尾大著

『現代イラクのイスラーム主義運動——革命運動から政権党への軌跡——』

有斐閣 2011年 xiii+350ページ

よし おか あき こ
吉 岡 明 子

2003年のイラク戦争でバアス党支配体制が終焉を迎えた後、新生イラクの政界をリードし続けているのは、シーア派のイスラーム主義政党である。しかしながら、彼らに関する学術研究は、長らく反体制派であったというその存在や、それゆえ資料収集が極めて困難であったという事情ゆえに、ほとんど蓄積されてこなかった。本書は、彼らイスラーム主義政党がいかなる組織で、どのような活動を経て、そして戦後イラクの不安定性にどのように影響しているのか、というこれまで明らかにされてこなかった問いに正面から取り組んだ一冊である。治安が安定していない現在のイラクは、残念ながら研究者が簡単にフィールドリサーチに行ける場所ではない。にもかかわらず、収集した膨大な一次資料を丹念に読み込み、近隣諸国での多数のインタビューを重ねることで、本書が極めて高い研究成果を誇っていることは、何よりも特筆に値する。

本書は、第1～3章が「イスラーム主義運動の誕生と革命運動（1950～70年代）」、第4～6章が「亡命期のイスラーム主義運動とその分岐（1980年代）」、第7～8章が「ディアスポラ期のイスラーム主義運動と国内社会運動の相克（1990年代）」、第9章が「国家を運営するイスラーム主義運動（2003年4月～2009年8月）」という4部構成となっており、1950年代から現在まで、時代を追ってイスラーム主義運動の歴史的変容を明らかにしている。

まず、第1章では、シーア派宗教界とイラクにおけるその役割を概観し、イラク近代国家の設立に伴う宗教界の衰退並びにそれに危機感を抱いた宗教界からの改革運動の発生が、その後のイスラーム主義運動につながったことが明らかにされる。第2章で

は、イスラーム主義運動の創設者であり理論的支柱となったバーキル・サドルの政治思想に焦点をあて、第3章では、近代組織としてのダアワ党の結党と組織化、バーキルを仲介としたシーア派宗教界との連携関係、そして政権による弾圧の激化によって国外亡命を余儀なくされるまでの活動を描く。

第4章は、イスラーム主義政党が亡命過程で分裂し、国内基盤を失っていった様相が記されている。続く第5章では、その分裂の背景として、彼らの亡命を受け入れたイランにおいて、ホメイニー体制を支持しイスラーム主義に基づくトランスナショナルな運動を目指すのか、それともイラク性というナショナルな方向性を目指すのかの相違が存在したことが指摘され、第6章で、その分裂を彼ら自身がいかなる政治的イデオロギーによって正当化していったのかに着目する。

イラン・イラク戦争の終結と湾岸危機・戦争という国際環境の大きな変化を経て、1990年代に彼らの活動は欧米諸国へと広がっていった。第7章では、イスラーム主義運動にとどまらずイラクの反体制派全体の統合が目指され、そしてその試みが頓挫する過程が描かれると同時に、そのなかで、ダアワ党が民主主義とナショナリズムのイデオロギーの影響を受け、それまで曖昧であったイラク性という方向性を体系化させていったことが明らかにされる。第8章では、経済的困窮と政情不安が深まる同年代のイラク国内に目を転じて、サーディク・サドルによる社会運動の拡大、および亡命イスラーム主義運動との連携や対立を取り上げ、その理由をナショナリズムの観点から説き起こしている。そして第9章では戦後イラクの政治プロセスを舞台にして、それまでの歴史的背景に起因する元亡命イスラーム主義政党間、および彼らと国内イスラーム主義政党の政策対立を取り上げ、終章が全体のまとめという構成になっている。

本書ではイスラーム主義運動の核としてダアワ党を中心に取り扱っている。ダアワ党は2005年にイラクで初めての総選挙が行われて以来、一貫して首相を輩出し、イラク政界の中心に位置している。選挙制度の関係もあり、必ずしもダアワ党が第1党となっているわけではないのだが、首相ポストを堅持し続けている背景には、同党が長年にわたって蓄積した組織力があるのであろうことが本書から読み取

れる。著者は、1980年に当時のカリスマ指導者だったパーキル・サドルが処刑されたことでイスラーム主義運動は痛手を負ったが、一方でそれは、ダアワ党が「集団的指導部」の必要性を認識し、党内選挙の導入や内規を整備し、組織化を進める契機になったことを指摘している（126～127ページ）。20年以上の経験に基づく組織力が彼らの強みになり、その強みが現在のイラク政界で遺憾なく発揮されているといえよう。また、活動を国際化させていった1990年代に、大国の介入は余計な混乱をもたらすとの考えのもと、イラク戦争の直前までアメリカとの接触を一切拒否していたという事実も興味深い（229～230ページ）。イスラーム主義政党が反体制派時代から、イラク人による統治やイラクの主権尊重を重視していたという事実は、彼らが政権を担うようになってからのアメリカとの交渉にも影響していると考えられる。2008年にイラクとアメリカの両国政府間で地位協定締結のための交渉が行われた際、3年後の米軍完全撤退というタイムテーブルを明記するよう求めたのはイラク政府の側であった。さらに、改善傾向にはあるとはいえ依然として連日のようにテロによる死傷者が発生する治安状況のなか、2011年の再交渉を経てもなお、イラク政府は米軍兵士に免責特権を付与しないという方針を曲げなかったことで、11年末の米軍完全撤退が決まった。こうしたアメリカに対する強気の交渉の背景には、イラク人の手に完全な主権を取り戻すことこそが最重要課題だ、という彼らの認識が存在したと考えられる。

さらに興味深い点は、ダアワ党とイランとの関係である。本書によると、1980年代、イランの最高指導者ホメイニーに無条件の支持を表明せず、イラン国家の介入を嫌ったダアワ党は、イランとの関係が難しくなり、ついにはテヘラン事務所の閉鎖を余儀なくされた（166ページ）。著者は、同党がイランとの距離を保つことが可能であったのは、単独で活動できるだけの組織構造と、少人数（数百～千人規模）ゆえにイラン国家財政に依存せずすんだ資金の独立性、党内での非ウラマー知識人の存在の拡大にあったと指摘し、これはイラン革命を礼賛し、イラン国家に依存し続けたSCIRI（イラク・イスラーム最高革命評議会）と対照的だと論じる（167～169ページ）。こうした両党の方向性の違いは、イラク戦争後の対イラン関係を読み解く手掛かりとなる

う。すなわち、ダアワ党がイラクで政権を取ることが、イランによるイラク支配に帰結するかのような単純なイラン脅威論が的を射ていないことを実証している。しかしながら現在、イラクの政権を握ったダアワ党が、イランをイラクの貴重な友好国と位置づける一方で、他政党がダアワ党（を含めたシーア派イスラーム主義政党全般）を、極めてイラン寄りだと非難し、不信を募らせるという構図もまた、存在している。パトロンとして利用しつつもその介入は避けたいとして、亡命時代にイランとの関係に苦慮したダアワ党は今、イラクの隣国であるイランとの外交関係を友好的に保ちつつ、イランの支配下にはないことを国内やアラブ諸国に向けてアピールせざるを得ない、という新たなイラン問題に直面しているともいえよう。

また、彼らの課題はナショナリズムにもあらわれる。本書では、ダアワ党が亡命時代から宗派、民族、イデオロギー的な差異を克服し、イラク人というナショナルなレベルで統合できる枠組みを模索することが重要だと認識のもとでナショナリズムを構築してきたことが指摘されている（225～228ページ）。トランスナショナルな汎イスラーム主義によって既存の国家とネーションの再編を図ろうとしたSCIRIはイラク戦争後に行われた選挙で敗北を喫した。一方でダアワ党は国内の支持を背景に、2009年以降、脱宗派主義、イラク国民の統合、国民的な政党リストの形成、強い中央集権国家、といった政策課題を掲げて、イラク国民主義をさらに強化していったことが論じられている（291～292ページ）。しかしながら、こうした彼らのナショナリズムが、現在のイラク全般において広く受容されているとはいえない。2005年から10年まで4回わたって行われてきた議会選挙や統一地方選挙の結果をみれば、ダアワ党の支持基盤を形成してきた地域は、主としてシーア派住民が多い南部に限定されており、これはいずれの選挙でも同様である。また、イラク政権の中核に位置するダアワ党やマーリキ首相は、挙国一致内閣を維持する上で必ずしもイスラーム主義政党だけを偏重しているわけではないが、不満を募らせたライバル政党からは決まって、宗派主義という非難が投げかけられている。

イラクでの結成、活動、弾圧、亡命を経て、イスラーム主義政党がイラクで政権を担うようになった

のは、その歴史のなかのまだまだ新しい出来事である。「シーア派の」イスラーム主義運動として出発した彼らは、これから隣の大国イランとの関係をどのように構築し、さらには彼らが理想とするナショナリズムを、今後いかに体現していこうとするのだろうか。本書は、「イラクにどのような国家を形成

すべきか、そこにいかなるネーションを作り上げるべきか」(302ページ)というイラク建国以来の課題に対する、イスラーム主義運動・政党の挑戦の軌跡である。そして、彼らのその挑戦の道のりは、まだまだ長い。

(日本エネルギー経済研究所研究員)